

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例
C. 教員の教育・研究指導能力の向上のための方策
②大学院生や教員相互のピアレビューでの授業評価による教育指導の改善

取組を進めるに当たり困難であった事例について

C. 教員の教育・研究指導能力の向上のための方策

②大学院生や教員相互のピアレビューでの授業評価による教育指導の改善

《人社系》

●千葉大学人文社会科学研究科

「実践的公共学実質化のための教育プログラム」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

留学生・社会人支援プログラム「日本語論文指導」は、指導を申請した留学生に対して、適切な分野からの人材を本研究科修了生（特別研究員）から選抜し、チューターとして定期的に日本語の指導を行うものであったが、複数の指導教員、チューター、そして留学生の間での情報共有に困難がみられた。

(苦労したこと、困難であったこと具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

日本語論文指導プログラム活用場において、事前の打ち合わせや業務分担といった教育支援内容自体における情報共有があまり上手くいっていなかったため、指導教員からの内容面での指導やチューターからの日本語添削などに重複がみられた。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

ピアレビューの機会を担保するため、グループウェアのシステム構築を図った。国立情報学研究所が開発したCMSであるNetCommonsを利用し、初心者でも使いやすいインターフェイスを用意することになった。各教員が同一の研究論文に対してどのような指導を行ったのか、時点時点でアーカイブしておくことで、教員のFDおよび将来大学での教育業務を担う若手研究者（チューター）の教育トレーニングに資する効果を企図している。

《理工農系》

●東北大学理学研究科

「理学の実践と応用を志す先端的科学者の養成」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

広域的学際養成サブプログラムのきめ細かい指導の一環として、個々の院生の学習・研究状況を詳しく記載した調書「教育カルテ」を作成し、複数の指導教員から組織されるアドバイザーボードにおいて博士論文作成への貴重な資料として活用されることを期待した。院生自らがこれまでの学習・研究の履歴を記載し、その成果を主任および副主任の指導教員に報告することにより、当該アドバイザーボードにおいて研究進展状況を確認するとともに、相互に情報を共有することを目指した。しかし、一部の教員から「この種の

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例

C. 教員の教育・研究指導能力の向上のための方策

②大学院生や教員相互のピアレビューでの授業評価による教育指導の改善

新規業務は多くの場合、実質を伴わない形骸化したものになりがちであり、理学研究科ですでに確立されたアドバイザリーボード制度も提出すべき書類が増え、副主任指導教員の選定にも時間と労力を要する反面、学生の指導上は効果は少ない」との批判があり当初に描いた指導体制を確立することは出来なかった。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

教員の多くが、施策を新たに導入するときの問題として、面談の対象が増えることに対する負担増が懸念された。コストをかければ教育効果はそれなりに向上はするが、負担軽減のために、例えばプログラム専従の教職員を雇用するなどの施策により、教員の講義増および学生指導やGP委員会活動に付帯する事務的作業の時間を最小限にとどめることが検討された。加えて、本来あるべき学生との密な研究討論や教員自身の研鑽の時間がもてない事になるのではないかという不安感、不満感の解消に努めた。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

教育カルテが、実績報告の際の証拠作りのための形骸化した書類作成ではなく、実際に学生の指導に役に立つものとして認知されるためには、このカルテを用いて、どのように具体的な教育を行うかの理念をより明確にすべきであった。さらに、提出されたカルテの情報の管理の仕方に関してより綿密な議論が望まれた。また、アドバイザリーボードと教育カルテが有効に機能する例として、いくつかの実例を示した方が、当該教員から理解が得られたと思われる。

●総合研究大学院大学先導科学研究科

「全教員参加型博士課程教育の構築」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

学生による授業評価アンケートを実施した。また、専攻内の教員はすべての授業に参加できるようにし、互いの授業を評価し合うことを奨励した。

学生アンケートは授業方法の改善に大いに役立てられたが、教員相互の評価の方は、教員が授業に参加できる時間は限られたことがあり、思うように進まなかった。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

授業を教員間で相互評価をするためには、授業に参加するためかなりの時間がかかる。端的に言って、教員が多忙すぎて、これに使える時間が無かった。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものでは

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例

C. 教員の教育・研究指導能力の向上のための方策

②大学院生や教員相互のピアレビューでの授業評価による教育指導の改善

なかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

授業評価をその道のプロの外部評価に委ねる大学もあると聴くが、これは専攻の教育方針に深く関わることゆえ自らの手で実行すべきことと考え、あえてスポット的な外部評価は入れなかった。しかし教員が多忙であることは今後も変わる事はないので、効果的な学生アンケートと教員会議の議論を通じて改善する試みに切り替える必要がある。